

SURFER'S HOUSE

ハイク、マカワオ、クラ……。マウイのサーファーたちは、ハレアカラ山麓の、"UP COUNTRY"に居を構えることを好む。そこは、森と牧場にかこまれ、清浄で、夜は薄手のセーターが必要で、眠りやすく、何より海が見える。黄昏時になると、斜光を返し、それぞれの家の窓が黄金に輝く。住人たちは今日の、心地よい疲れに身を委ねながら、ノースの海を眺めている。明日のスウェルを夢見ながら。

撮影 | ダレル・ウォン
photo by Darrell Wong

取材 | 岡崎友子
text by Tomoko Okazaki

構成 | TOKO
edit by TOKO

下界であそんで天界にかえる。

カナハ、スプレックス、ホキーバ、そしてJAWS、マウイのノースショアは、サーフィンの、ウインドの、カイトの世界的メッカである。夕方、海から上がったローカルたちは、ビーチパークのシャワーでさっと潮を流し、赤く錆びたビックアップやウァンにボードを放り込み、それぞれの家に帰る。ノースショアは、最高の、アクシヨンの、アドレナリンの場だが、じつは暮らすには最適といえない。蒸し暑いし、貿易風で巻き上げられたマウイ特有の赤土が、汗の肌へべたついたりする。だからかれらは、ハレアカラ山麓のハイクヤ、マカワオ、プカラニ、クラ、いわゆる「JP COUNTRY」に居を構えることを好む。バルドウィンアベニューに、ウルマル、カウヒコア、ココモの3ロードが、そこへと帰るアクセスだ。いずれも山麓をくねくねと登る細い道。途中、ハレアカラから降りてきた雲で濃霧になり、視界が奪われることもしばしばだ。ハイクは渓谷、アップカントリーは森と牧場で、涼しく、湿潤であり、ユーカリの葉が露で濡れ、鹿や猪、孔雀などの野生動物がいる。家に帰り、シャワールームでソープを使い、裸足で芝の庭に出て、パイアアをもち、心地よいエンドルフィンに身を委ね、しばしくつろべ。かれらは、下界であそんで天界にかえるのだ。そして襟つきのシャツに着替え、マカワオのポーターズや、パイアのジャックスに、ディナーに出かける。いつもの仲間と、今日の波について語り合う。気づくと9時になっていて、さっきから眠くてしかたなく、あとはふかふかのベッドに身をなげるだけ。いつもの、完璧な、いちいち。

中里尚雄（談）

海洋冒険家。マウイに活動の拠点を置いて23年になる。

<http://www.sportsman.ne.jp/niseo/>

Maui Haiku Robert Terri-tehau's House

ノースを見渡す3200坪の森の丘。
自分で建てた母屋とコテージ。
住宅というよりは、プライベートリゾート。



シャイでワイルド、この顔にこのカラダ、この持ち家、モテないわけがない JAWSにてトゥイン。このサイズでも、ただ乗るだけでなく「何かやる」オープンデッキは全てのリビング、寝室につながる。果実樹の向こうは海 木々が配されメインハウスと別棟は互いにほとんど見えず、プライバシーを確保 写真では見えないが、シャークアタックされたボードとシャークジョー



PERSONARITY
ロベール・テリテオ フランス・タヒチ出身の39歳。18歳にしてウインドサーフィンのWCにデビュー、同時にトッププロに。以後ウォーターマンとして活躍を続け、現在もトゥインサーフィンでJAWSを攻めます。そのワイルドな風貌とパフォーマンスで、本国フランスでは国民的アイドル。国民的美女とも浮き名を流す。

HOUSE FACTS
立地：ハイクヒルズ。高級住宅用に開かれた、ノースショアを望む森の丘。
敷地面積：2.6エーカー(1ヘクタール以上！)
延床面積：自分の居室部分が186㎡(バルコニー含まず) 母屋よりも広いガレージ、倉庫、賃貸しているユニット、ゲストハウスなど。

だ。でも余った時間はほとんどこの家にかかりつきりだね。そう、今も建設途中だよ。アイデアは自分で考え、それをどうすれば実際に作れるか専門家に相談しながらとっていく。僕は完全主義、という頑固で、いったん決めたら融通が利かないので完璧にできるまでやり通す、ちよつとも納得のいかない部分があったら壊して、またいちから作り直す。だから時間がかかる。メインハウスを作ったときにある程度学んだので、それからは自分でほとんどやれるようになった。大工道具もぜんぶ買った。それを仕舞うために小さな家らしいの小屋を建てなくちゃならなかった(笑)。

家造りで最優先したのは、まわりの美しい緑を殺さず溶けこむこと。そのため新建材ではなく、竹や無垢の木材などできるだけ自然素材を使った。それも僕はタヒチの出だから、タヒチやハワイのポリネシアな匂いを感じさせるものを、インテリアはたくさん竹を使った。これはタヒチのスタイル。たとえば水道管に竹を使ったり、洗面ボウルに大きな貝を使ったり。パズルームは石で造ったが色がいまいちで壊して作り直した。

細部について語り出したら切りがないけどね。

プライベートエリアで外部の喧騒を感じさせないことに気を配ったね。広いので外の音とか動きはほとんど感じないし、同じ敷地に何人か部屋を借りて住んでいるけど、木々が互いのプラ

十代でウインドのプロになってから(仕事の拠点となる)、マウイに土地が欲しいと思ってた。この土地の話は聞き、見に行くと、ホキーパーが正面に見渡せ走っているウインドのセイルが見えた。こりゃ買っちゃいけない(笑)。93年のことさ。ただしさか広すぎて予算オーバーだった。いくらだったって？ 60万ドル、今だったらいくらするだろうね。お金が足りなくて、生活できるだけの小さなコテージを建て、とりあえずそこに住みながらメインの家を建てる金を貯めようと思っていったんだが、この土地の法律では最初にメインハウスを作らなくてはならないという。仕方ない、自分で建てるしかない(笑)。経験、全くの素人さ。いるんなら手伝ってもらいながら少しずつ学んでいった。

毎日朝7時から夜10時くらいまで家を建てていたよ、さすがに本業がやばくなってきた。ワールドランキング2位だったのが、95年には4位、96年5位、97年6位とどんどん落ちていったので、午後2時になったら大工仕事を止め、海にトレーニングに行くようにしたん



galage life

彼らの家を訪れて羨ましいのはもちろん全てなのだが ガレージだ。テリテオ邸のそれは家よりでかいが、車5台、モトクロスバイク、マリッジット (JAWS でのトゥインサーフィン用) もあって全部は収まらない。ハマーは街で幅をきかすためではなく、ロードアクセスのないサウスのシークレットポイントに行くため。普通のタフ4駆では車軸を折るなど使い物にならず、ハマーに辿り着いた。



目覚めるとその大きな窓からノースショアが見渡せる。波の有無も一目瞭然 全てはテリテオのデザイン、並みのインテリアコーディネーターなど逃げ出すセンス 石を探すことから始めたバスルーム。が、色が気に入らず、全部壊して作り直した タヒチ特産の貝殻を使ったポウルと蛇口。これももちろん彼のアイデア



個人の家というより、中規模の、親密度で驚沢なリゾートのようだ。高い天井のせいか竹のせいか居心地の良いリビング。額絵も自身で描いた

ネクタリン、パイナップル、マンゴ……敷地には約5000の草木。もちろん実が成って食べられる。

イヴァシーは確保されている。そうそう、ここにはね、オレンジ、ネクタリン、タンジェリン、パイナップル、マンゴ、アボカド、タヒチ原産のティアレヤ、タヒチアンガー、ティニアなど約5000の草木が育っている。もちろんぜんぶ実が成って食べられる。

家屋の建設や補修だけでなく庭のメンテナンスもあるから、週に4日、7時から4時ごろまで時間を取られるよ。サーファーハウスとしてで工夫点とくに無いと思うよ、というか家にいるときはプロサーファーではない、スローな一人の男としてリラククスしたいしね。夜、時間があるとき絵を描くのが好きなんだ。いろんなプレッシャーから離れてリラククスできるんだ。サーファーの家だとわかるのは……、そう、コアウッドのフレームに入った2枚のJAWSのライティング写真くらいだよ。反面、ガレージはものすごい数の道具であふれている。これはプロサーファーならだよね。

全般的にももちろん自分らしい家であって入ってるけど、波乗りと同じでやればやるほどさらに追求したくなる部分が出てくる。だから10年かかっても終わられない。でもそれが苦痛じゃない、どころか楽しい。楽しくないとこんな膨大な労力、かけちゃいけないよ。今の課題？

小さなものはいろいろあるけど、常に直してる。

中長期的な課題は、とりあえず完成させて、一息つくことだね(笑)。

Maui Haiku Pete Cabrinha's House

才色、体力、経済力兼備の「完璧な夫婦」が住む家は、スイートホーム兼アートスタジオ



family business

マウイには多くの職業的サーファーがいる。パフォーマンスだけではなく、自営的な仕事を持っている者も多い。スポンサーから自由になり、年を取っても同じライフスタイルを送りたいという理由で。仕事はサーフィン関係で、波が良いときは海に行けるという条件を満たすもの。具体的にはボードシェイパー、ウインドのセイルロフトなど。ウェアデザインなどアート系も多い。カブリナ夫妻もその典型である。



増築したデザインスタジオ。ここで想を練ったり、リラックスしたりする時間が好き。所有ボードのごく一部、本業のカイトのギアはとてつもなく、倉庫に山ほど

PERSONARITY

ピーター・カブリナ ハワイ・オアフ島出身の44歳。5歳から波に親しみ、ウインドサーフィン、トゥインサーフィン、カイトサーフィンのパイオニアであり、トップウォーターマンとして尊敬されている。美しい妻と娘を持ち、自ら興じたカイトやトゥインのメーカーのオーナーであり、波の上でもばりばりの現役。

HOUSE FACTS

立地：ハイク。広い庭の向こうに海を望む。
敷地面積：2.5エーカー（1ヘクタール！）
延床面積：リビングが約190㎡、仕事のためのスタジオ。近い将来プールを作ろうと思っている。



ピーターとリサは、天から全てを与えられたような夫婦だ。第一に美男美女である。映画トップガンがヒットしたころ来日したピーターは悪友にデイスコに連れてゆかれナンパのダシに使われた。「こちらトム・クルーズ」と紹介され、相手が信じたという逸話がある。

ウインド、トゥイン、カイトサーフィンのパイオニアとして知られるトップウォーターマンであり、2004年には、JAWSの70フィート、史上最大の波に乗ったショットで賞金70000ドルを獲得した。近頃は自分のビジネスのせいで海で過ごす時間が減ったことは確かだが、それでもサーフトリップに出かけたりするし、波がいい日は決して逃さない。

（カブリナカイトサーフィン）というカイトとトゥインの用具メーカーを興し、軌道に乗せているのみならず、アートの才能も持ち、自社の広告を製作したり、コラージュアートの賞を取ったこともある。

カメラマンとしてもかなりの腕を持ち、最近では黒い幕をバックにしたスタジオタイプのポートレートに凝っていて、多くのレジェントウォーターマン、ウインドサーファー、カイトボーダーのポートレートを撮りためている。

妻のリサもかつてスポーツモデルでプロウインドサーファーだった。現在はよき母であると同時に、（ラターテ・スィムウエア）というファッショントップランドを姉とともに経営し、そのデザ



風通しがいいライナからは、朝日も夕日もノースの海も見渡せる シックとパンキッシュの組み合わせ。二人のおしゃれさをうかがわせる



センスのいいオブジェや写真があちこちに置かれるが、けっして画廊風ではなく、あくまで居心地よい「ホーム」



装飾のための装飾ではなく、アイデアのメモであり、発想の種子である ゼブラ柄はリサのお気に入り。アンティークボードとの不思議なコーディネート 家族のバスルームは白大理石。ゲスト用のそれは黒大理石でシックにあえて窓際に寄せ、ダイナー風で居心地のいいダイニングテーブル

なステンレス製のものを使ったかった。でもステンレスは冷たいから、チェリーウッドのキャビネットや大理石、ユーカーリのフローリングなど自然の素材でウォームに。特に木をたくさん使った。

インテリアは妻の担当。なにせテキスタイルデザインのプロだから、なんでもない柄や色の生地を組み合わせ、とても心地よいインテリアをつくる。だいたいは満足しているけど、バスルームはもっと広くすれば良かったな（でも、4畳半くらいありますけど…）、あと、オープンエアデッキももっと広く。

プールを造ろうと思ってるんだ。娘のタヒチや、友人たちが喜ぶと思うから、家を建てた後、アートスタジオを増築したんだ。そこで僕は、趣味であり、仕事の一部でもあるアート製作をする。今ではここが家の中で自分の一番のお気に入り、インスピレーションを与えてくれるイメージやアートに囲まれて過ごせるから。

そのアートスタジオにはやりかけのプロジェクトなどが雑然と置かれていて、小さなロフトもあり、そこには紙のランプシェイドとシンプルなベッド。アートスタジオのみならず、家のあちこちに小さなオブジェや雰囲気の良い写真がディスプレイされている。ある場所にはアンティークのサーフボードと水着用のゼブラの生地。ミスマッチなはずだが不思議にじっくりくるのはこれらのセンスゆえか。

インを担当している。

あのスポーツイラストレイティッド誌のスイムウェア特集号の常連（掲載されるのがスポーツウェアブランドの登竜門となっている）であり、各誌のカバーを飾ることも多い。

この（ラターテ・スイムウェア）のカタログやボスターの撮影は夫のピーターが担当し、素晴らしい作品に仕上げている。

こんな、パーフェクトな夫婦だが、住む家だけはなぜか平凡で…、というわけではないのである。

かれらの邸宅はハイクにある。

25エーカーの広大な敷地。

庭は広く、黒い火山岩で作られたハワイアンスタイルの低い垣根に守られた広い庭の先に海が見える。

3000スクエアフィートのリビングスペースとは別に、デザインロフトが建てられている。

ピーターはいう。

「理想に近い土地を買って、自分たちで設計した家建てた。自分たち、そして友人たちにとって快適で、僕らのライフスタイル、そしてアーティスティックなスタイルに合った家を作りたいかった。そして娘のタヒチが思い切り遊べる広い庭が欲しかった」

ハイクの森の中に住むのだから、僕らの家もトロピカルなフィーリングを感じさせるものにしたかった。ポリネシアンとアジアンの混血のような外観、窓をたくさんとって明るく。

キッチンや冷蔵庫、設備全般に機能的

Maui Spreckelsville Martin Lenny's House

朝、ゴルフカートで海をチエック、
14時半には仕事を終えて、息子たちと
海に出るための家。



PERSONARITY

レニーファミリー 父マーティン(40)不動産エージェント、母ポーラ(40)医師、長男カイ(13)プロウインドサーファー、次男リッジ(9)とにかくウォータースポーツ中心のライフスタイル。ここに家を建てたのもそのため。

HOUSE FACTS

マウイノースショアのピバリーヒルズと呼ばれるスプレックスビル。街にも海にも近く、便利。
敷地面積：300坪強。
延 床面積：約400m²、4ベッド4バスルーム、3つのガレージに車と海の道具が満載。



エントランスホールにて。絵に描いたように幸福で健康な家族 父が設計したギアガレージ。大量の道具が機能的に収納、ピックアップできる 家族4人分の道具、コンディション次第で、今日はカイトかウインドか 父として、ビジネスマンとして、ウォーターマンとして、男盛りの40歳



9歳のリッジ。13歳の兄、カイはすでにプロウインドサーファーである。こういう絵を描いて育った子供はニートにも引きこもりにもならないだろう



仕事フレキシブルなので、14時半には仕事を切り上げ、15時に学校から息子たちをピックアップし、海へ直行。ウインドやカイトを楽しむのが毎日のルーティンなんだ(毎朝ゴルフカートに乗って波をチエックするのよね)。妻のポーラは医師で、仕事5時に終わるのでそれから合流するんだ。とにかく毎日家族で海で遊ぶ。この家もそのために買ったよなものさ。もともとこの家の2軒隣りに住んでいたんだけど、こっこの家のほうが広々として住みやすそうだったので買い換えたんだ。海にも職場にも子供たちの学校にも、どこへ行くにも便利なロケーションなのでとても気に入っている。スプレックスは、昔はそれほど人気のあるエリアじゃなかったんだが、今じゃみんなここに住みたがっているよ。高かったらうって？ 2003年に88万5千ドルで購入し、さらに約10万ドルかけて家族が使いやすいように改造したんだ。買ったときは、白い大理石とカーペットフロアで、冷たくて気取ったかんじだったんだ。大理石をぜんぶ剥がし、私たちが好きなコアウッドとハードウッドフロアに換えたんだ。フォーマルな感じを消し、迎え入れられているような家にしたかった。そうならない？ 家の前はゴルフ場で、間に水路があり、小さな噴水もあるのせせらぎの心地

サーフビデオを見ながら、ポスターからインスピレーションをもらいつつ筋トレ 父の趣味は、アンティーク(とくにスポーツの道具)を収集し飾ること 1920年代のサーフボード、むかし、日本の漁師が浮子に使ったグラスボール 椰子の葉擦れの音と木漏れ日に目覚める マスターベッドルーム バスルームの外にはジャグジ。海から上がって家に帰るのが楽しみ



窓の外はゴルフ場。水路と噴水。耳を澄ませば、心地よいせせらぎが聞こえる ダイニングキッチン。構えは豪邸といえるレベルなのだが、内装はスローでシック

ハワイアンカーヌーをカートに積んで、海までとことこ牽いてけるなんて最高じゃない?

maui surfer's house today

不動産のプロであるマーティン氏に、マウイのサーファーズハウス事情を聞いた。「ハイクやアップカントリーに広い土地を買うことは長く続くトレンドだが、海とタウンの近くに手入れの楽な小さな家を構えるのも人気。ただ土地が暴騰しているので、最近では水道もないハナあたりの土地まで対象となってきている。でも、サーファーなら、マウイに住んでるだけで充分ハッピーだけれどね」

以前、僕はオーシャンフロントの大きなレストランのジェネラルマネージャーをしていたので、潮に強い樹木についてノウハウがあるんだ。だからあまり手入れをしなくても良く育つ草木を使って庭を設計したんだ。庭いじりしてる時間があつたら海で遊びたいからね。

この家のユニークなところ? エクステリアに、STUCCOという耐候性の高い建材を使っている。普通は屋根に使うんだけどね。海に近いので、木材とかだとひんぱんにペンキを塗り直したりメンテが大変なんだよ。庭もね。

よい音がする。もつと大きな噴水を家の近くに造ろうと思ってるくらいだよ。椰子の葉がかきこそ風に揺らぐ音も安らぐし、葉の緑と、青空や雲とのコントラストもきれいだね。でもなんてたって海に近いことだね。ハワイアンカーヌーをカートに積んで、海までとことこ牽いてけるなんて最高じゃない?

それ?

グラスボールって、むかし日本の漁師が浮子に使ったものなんだ。古いガラスの暖かみとシンブルな感じが好きで集めているんだ。以前はビーチで拾うこともできたらしいけど、今は店で買わなくちゃならないんだけどね。

不動産が売れるたび、自分へのご褒美で買うことにしてる。最近忙しいから、コレクションルームが別に必要になるかも知れないね(笑)。

グラスボール以外も、海を感じさせるものでいっぱいだよ。古いサーフィン、ウインドサーフィン、カイトサーフィンの道具を集めて家の回りに飾るのが好きなんだ。1930年代のサーフボードもあるよ。

それに新しいボード!

(指を折りながら)ウインドサーフィンボード、ブギーボード、サーフボード、トゥボード、パドルボード、ロングボード、スキンボード、カイトボード、それが家族4人分!

それらがぎゅぎゅとちりちり積まれるラックを設計し、(4人分の道具を積んで海に行けるラックつきの)ゴルフカートとジェットスキーごと収まるギアガレージを造ったよ。その横はジムで、ウオータースポーツに必要な筋肉群を鍛えるマシンが揃っている。

ジャグジもあって、海から上がって家族で入るのが楽しいね。